
引き裂かれたラブレター

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

引き裂かれたラブレター

【Nコード】

N7012K

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

登校中、いきなり背後から殴られた「俺」は、驚いて振り返った。
そこには。

突然背後から殴られた。固く握りしめた拳で、ガツンと。背骨がめりこむような異様な圧迫感と、体を一直線に突き抜ける激しい痛み、俺は悲鳴を上げた。

それは校門の前での出来事だったので、当然周囲にいる生徒が一齐に振り返った。

「痛つてーな」

俺は背中をさすりながら、目の縁に涙を溜めて、こんなに力いっぱい殴ったのは一体どんな奴だろうと、振り向いた。そこには、顔を真っ赤にした女子生徒が息を切らせながら立っていた。

見たことのない顔だ。よく見れば、ずいぶんと整った顔つきをしている。しかし、顔は渋く歪められ、綺麗に整った眉毛を寄せ、眉間に大きな皺が寄っている。せつかくの美人が台無しだな、とこんな状況にも関わらずぼんやり思う。

「あんだ、最低ッ！」

彼女は拳を握りしめて、そう言い放つ。その大声に、俺の鼓膜は破れんばかりに震え、俺は必死に耳をふさいだ。

突然見知らぬ生徒に殴られ、おまけに大勢の生徒の前で最低！と叫ばれて　状況がつかめずにただただ啞然とするばかりだった。

大声を上げた女子生徒は、潤んだ目を細めて俺をきつと睨むと、そのままくると背を向け、走って行ってしまった。

「あれま。お前、なんか恨まれるようなことしたのかよ？」

近くを通っていた島崎が、にやにやと薄笑いを浮かべながら、近寄ってくる。

俺はひりひり痛む背中をさすりながら、首を傾げてみせる。島崎は笑いをかみ殺すように肩を震わせながら、口を開いた。

「もしかしてあれか？　昨日お前の靴箱に投函されていたラブレターを引き裂いて、送り主の机の中に入れておいたのがまずかったの

かな？」

「つてお前、勝手にそんなことしたのかよ！」

俺は思わず叫ぶ。

「だってよー、ラブレターなんかちゃっかりもらっちゃって、うらやましかつたんだもん。ついつい嫉妬のあまりに引き裂いちゃったのさ」

「引き裂いちゃったのさじゃねえよ！ 誤解されるのは俺なんだからな！」

「あーいい気味」

島崎は鼻歌を歌いながら頭の後ろで両手を組む。

俺は額を手で押さえて大きくため息をつく、鞆を脇に抱えて、走り出した。

おい、と島崎が呼ぶ声がする。

俺は振り返り、苦々しい表情で「彼女に事情を説明して謝つてく」と言つて、そのまま走り出した。

玄関に入ると、下駄箱の前を歩いている彼女の背中を見つけた。

彼女はどこか憂鬱そうな表情で、考えに沈むように顔を俯かせている。

「君」

呼びかけた瞬間、彼女が弾かれたように肩を飛び跳ねて振り返る。俺の顔を見た途端、目を大きく見開き、その白い肌がみるみる真っ赤になる。しかし、ふと我に返ったように肩を震わせ、途端に目の奥に悲しみが広がり、彼女は目を伏せてこちらに背を向けると、途端に駆けだした。

「待って！」

俺は声を張り上げて、靴を無造作に脱ぎ捨てると、廊下を走っていく彼女の後を追う。彼女はショートヘアの茶色い髪を左右に振り乱しながら、まっすぐ階段に向けて走っていく。

「ちよつと！」

階段を上っていく彼女を視線で追った瞬間、ひらりと彼女のスリ

ートが翻り、白いパンツがちらりと見えた。俺はぎょつとして慌てて視線を逸らす。

てつきり二階の教室に向かうと思いきや、彼女は二階をスルーして、階段を上り続け、そのまま屋上へと向かっていく。

俺は息を切らしてへとへとになりながら、震える膝に喝を入れて上り切り、屋上へと続く扉を開け放った。

ふわりと風が顔に吹きかかり、前髪が逆立つ。彼女は屋上の柵の前に立ち、肩を忙しく上下に揺らしながら、こちらに背を向けている。

俺は扉を後ろ手に閉めて、彼女にゆっくりと近づいていく。

彼女は振り返った。彼女の頬に一筋の涙が流れている。風が吹き、雫が、輝きながら散っていく。

彼女は憎しみをこめた視線を俺に向けてくる。俺は彼女の前まで来ると足を止め、制服のポケットからハンカチを取り出して、差し出した。

「拭けよ」

そう言うてにこりと笑うと、彼女の瞳の中にあつた憎しみの感情がふつと消え、動揺と怯えが見え始める。

「どうして」

彼女は消え入りそうな声でそう言った。俺は、そつと彼女の手を取り、ハンカチを握らせる。

「手紙ありがとう。うれしかった」

その言葉に、彼女の目が見開かれた。どうして、と再び唇から言葉が漏れる。

「破ったのは俺じゃない。俺はそんなことしない」
「嘘」

彼女はハンカチをそつと目元に押し当てた。青い生地が、黒く染み広がっていく。

「君の名前を覚えてくれ」

俺はそつと彼女の肩に手を置く。彼女の体がびくりと震えた。

じつと俺の顔を見返してくる彼女に、俺はもう一度、「教えてくれ」とつぶやく。すると彼女はおそろおそろといった様子で口を開く。

「さいとう……斎藤緑」

俺はうなずいて、彼女のもう片方の肩に優しく手を置いた。

「緑さん。ありがとう。嬉しい」

彼女の目が見開かれ、そしてゆっくりと眉が垂れさがっていき、一層目元に涙があふれていく。彼女の白い頬に朱が広がる。

その瞬間思った。これで、落ちたな、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7012k/>

引き裂かれたラブレター

2011年10月5日02時23分発行